

憑きもの筋に関する文献資料の情報発信源としての意義と特徴

—— 戦後高知県の「犬神」を事例として ——

酒 井 貴 広

はじめに

本稿は、従来インフォーマントからの聞き取り調査に基づく語りを一次データとしてきた憑きもの筋研究に対し、メディアや文学作品に代表されるフィクションからの情報発信を「個人・社会に外在化した憑きもの筋」と捉え、これらを一次データとした憑きもの筋研究を試みるものである。

筆者は2011年以来高知県西部の幡多地方でフィールドワークを行い、当地の憑きもの筋である「犬神」に関して、①昭和30年代後半から昭和40年代前半に生まれた人々とそれ以降に生まれた人々の間で、有する知識量に大きな差が見られる、②「犬神」がもはや社会で共有される知識ではなくなり、インフォーマント個人によって大きな偏差を持つ知識となっている、といった知見を得た。また、それらの内容分析から、③「犬神」は、経済格差の問題に収斂する趣の強い狐憑き・狐持ちとは異なり、他人に対する誹謗中傷の語りである、との結論に至り、憑きものにはその憑依主体による個性・独自性が存在するのではないかという仮説を形成した〔酒井 2014〕。

憑きもの、とりわけ結婚差別を中心とする社会問題を伴う憑きもの筋に対して、戦後から昭和40年代にかけて民俗学・人類学の両翼から数々の論考が提出された。また、昭和50年代には小松和彦が説明体系としての憑きものを提唱し、憑きもの研究の大きな画期となった。これらの研究成果は憑きもの（特に憑きもの筋）の発生要因や社会における機能を中心に多くの発見を残したが、概して遡源的もしくは共時的研究であった。この表現は先行研究の不備を指摘するのではなく、戦後の憑きもの筋の問題が社会的緊張を伴う喫緊の社会問題であった上に、戦後の再燃から十分な時間が経過していないため、遡源/共時的な研究手法のみが可能であったと再確認するためのものである。しかしながら、今日の高知県幡多地方の「犬神」が先行研究の示してこなかった変容を遂げていることは明白であり、戦後の憑きもの筋撲滅運動から五十余年経過した現在において、インフォーマント達の考える「犬神」にいかなる力学が働いてきたのかを検討する必要性に迫られている。これらを踏まえ、憑きものの「通時の研究」に着手することは、憑きもの研究に過去から現在へ続く（ひいては未来への予測をも含む）横糸を導入することであり、従来の憑きもの研究を縦糸として、今後の憑きもの研究をより立体化させるため大きな貢献をするであらう。

う。

以上の目的を基盤とし、本稿では、今日まで一次資料として顧みられることの乏しかった戦後の新聞記事や小説を用い、それらの出現頻度や引用関係、実生活との相互関係を明らかにする。

1. 先行研究の憑きもの筋研究とその到達点

1-1 憑きもの筋とは

日本における「憑きもの」には、野にいる動物や霊魂、人間の生き霊、精霊や神が突発的に憑依するものと、特定の家筋が憑きものとなる動物霊等を使役しているとするものが存在する。この憑きものを使役する特定の家筋も、霊能を自称し意図的に憑きものを使役する家筋と、無意識のうちに動物霊を使役していると周囲からされてしまう「憑きもの筋」に分類することが出来る。

以上三分類のうち、日本の憑きもの研究の主流となったものは、第三に挙げた憑きもの筋である。憑きもの筋は、西日本を中心として近世に出現したとされる新たな憑きものであり、憑きもの筋とされた家筋の者は、周囲の者から結婚を忌避される、意地が悪い、嫉妬深いなど謂われ無き人格攻撃を受けるといった強い差別に晒されてきた。本稿は「憑きもの筋」を考察対象としている。

本章では、データによる議論に先駆けて、これまでの憑きもの筋に関する先行研究の展開を通時的に追う。この作業は先行研究の到達点を明らかにするとともに、後の章で行う文献資料の検討のため、戦後の憑きもの筋にまつわる資料で度々引用された石塚尊俊、速水保孝、吉田禎吾、小松和彦らが社会に発信してきた「憑きもの筋」情報を確認する意図をも有する。

1-2 戦前までの憑きもの筋研究

「憑きもの」という語の発生時期は語彙史の領域でも未だ結論に至っていないが、「憑きもの筋」として特定の家筋に結婚や人付き合いを中心とする差別がおこなわれた事例は、近世が初出と考えられている。

憑きものに対しては、憑きもの筋も含めそれらを迷信と断じ否定する言説が長期間支配的であったが、明治期の精神医学がこのテーマに初めて学術的な分析を行った。精神医学は、憑きものに付随する肉体的、精神的に異常な状態の原因は、野山にいる動物や、使役者とされる特定の家筋の側にあるのではなく、被憑依者の肉体的・精神的形質の欠陥にあると述べている。

精神医学の憑きもの批判に続く形で、歴史学も憑きもの研究を行っている。大正11年には、文献史学者の喜田貞吉が、憑きもの筋に何ら信頼すべき論拠が無いことを学術的な手順を踏まえて示す必要があるという問題意識から、憑きものの全国的な資料集成を世に送り出している〔喜田1922〕。この問題意識は、後述の柳田国男、石塚尊俊、速水保孝らに色濃く受け継がれている。

1-3 民俗学の憑きもの筋研究

憑きもの筋の語りは、明治、大正、昭和と時代が下るにつれて弱まる兆しを見せていたが、戦後期に憑きもの筋の語りと社会的緊張を伴う差別が再燃し、これを批判する形で憑きもの研究が盛り上がった。憑きもの筋撲滅運動とも言うべきこの運動の先駆けとなったのが民俗学者達である。

柳田国男は戦前から既に憑きもの筋の問題に着目しており、石塚尊俊の述懐によると、早くから憑きもの筋の根底に富裕者への嫉妬があるのではないかと予見していたという。また同時に、人々の憑きもの筋に対する恐れは、仏教の隆盛によって廃れた修験道などの古い信仰を続ける家（もしくは個人）への、得体の知れないことに対する不安が根底にあると分析している⁽¹⁾。

石塚尊俊は、憑きもの筋による社会的緊張の解消を目指し、柳田を発展継承する形で憑きもの筋の全国的な研究を行った〔石塚 2001〕。後に石塚自身が民俗学全体の傾向として自省したように、石塚の研究は憑きもの筋の起源解明に重きを置いている〔石塚 1990：pp.498-499〕。石塚は、集落における憑きもの筋が占める割合や本末関係、家や田畑の立地を手掛かりに、少なくとも島根、高知、大分といった憑きもの多数地帯においては、コミュニティ内の富や資源が第二期入村者によって一部奪われる（もしくは独占される）ことに嫉妬した第一期入村者が「憑きもの筋」の語りを生成し、新来者がそれに同調したことが憑きもの筋の発祥になったと述べている〔石塚 2001：pp.155-169〕。彼の研究において着目すべきは、三つの憑きもの多数地帯の根底には、共に経済的な嫉妬が存在するとした点であろう。

こうした民俗学者達による研究と並行して、経済格差や嫉妬に注目しつつも異なる見解を示した研究に、速水保孝の『憑きもの持ち迷信』が挙げられる〔速水 1999〕。彼は、自身が狐持ちの家という立場故に、憑きもの筋とされる人々を直接的なインフォーマントとした多数の資料の収集に成功している。速水は憑きもの筋の発生、特に狐持ちの発生について、享保期の貨幣経済浸透を挙げている。彼は、享保期に貨幣経済浸透の流れに乗って富を築いた人々に対する小作人らの嫉妬を憑きもの筋発生の原因とした上で、家の繋がりが強力で農業を家の人間だけで行う東北地方や、逆に貨幣経済が十分浸透した近畿地方では憑きもの筋の語りが生成されず、東北と近畿の中間とも言うべき社会経済の発展を見せた西日本でこそ、憑きもの筋が強力に成立し得たと結論付けている。

1-4 人類学の憑きもの筋研究

人類学の憑きもの筋研究は、吉田禎吾が、昭和30年代末に石塚尊俊から紹介されたフィールドを社会人類学的に研究したことが、嚆矢となった。吉田は、アザンデ人の邪術や妖術との比較など、世界各地の possession との比較を行うことで、日本の憑きもの筋を社会における機能という新たな視点から解釈することに成功した〔吉田 1990〕。

その後も社会人類学的研究は綾部恒雄ら多くの研究者によって続けられるが、人類学による憑きもの研究の画期として、小松和彦の唱えた「つき」への注目と「説明体系」がある。小松によると、「憑きもの」の語において重要視されるべきは、「憑き」の部分であり、人々は自分自身や他人の身に起こる説明不可能な出来事を仮にでも説明するために「ツキ」の語を利用し、何とか現実と折り合いをつけているのだという。従来の民俗学が重視してきた「もの」は、「ツキ」を名詞化するための機能のみを有し、そこに重要な意味はないと小松は指摘する〔小松 1989a；1989b〕。

その後の憑きもの筋研究は、民俗学、人類学の両翼ともに、既存の研究枠組みに新たな地域や事例を適用する傾向が強く、大きな論理的転回は起こっていない。

1-5 憑きもの筋研究の到達点と批判—今日の憑きもの筋研究への展望とともに—

以上憑きもの筋に関する先行研究を概観したが、これらの到達点と問題点の洗い出しを行う。

まず、民俗学の研究に目を向けると、石塚は柳田の唱えた零落信仰への恐怖を、「憑きもの筋は恐ろしいものだ」という社会通念を先行的に生み出すものであったと考え、憑きもの筋の語りが富裕者層への侮蔑たり得る社会において、第二期入村者が周囲の人々の攻撃対象になるとした。石塚の第二期入村者説は、「経済的な嫉妬」という恐怖・畏怖とは大きく異なる要因を憑きもの筋研究に導入した点でエポックメイキングなものであった。しかし、第二期入村者という「新来の成上り者」の想定に関しては、石塚自身が憑きもの多数地帯とした、島根、高知、大分の三地点に限っても、高知県で犬神筋とされた人々は第二期入村者ではないなど、再考の余地を残す〔石塚 2001:pp.155-169〕。また、香川による昭和50年代から平成初頭にかけての徳島県における犬神研究〔香川 2000〕からも、憑きもの筋とされる人々と非憑きもの筋の人々の間に、明確な経済的格差は見出せない。

民俗学の近縁的研究として、速水による享保期の貨幣経済の浸透が挙げられるが、彼の研究も島根県加茂町のモノグラフとしては重要な意義があるものの、日本の憑きもの筋全体の分析としては疑義を呈せざるを得ない。なぜなら、仮に享保期前後に貨幣経済が日本に浸透したことを肯定するとしても、その浸透度合いの分類が、東北、近畿、西日本の三分類で事足りるとは考え難いからである。『憑きもの持ち迷信』に序文を寄せた柳田も、速水の提示する一次資料の重要性を認めつつも、同時に特異な例に偏り過ぎたきらいがあると批判的示唆を残している。速水の考察は、実際の調査対象から日本全体へと議論を立体化する過程において、調査地ごとの生業や、エリアそのものの切り分けにおいて大きく飛躍した点があることは否めない。

次に、人類学の憑きもの筋研究に目を移すと、この分野からの研究は、民俗学の遡源的研究を一旦離れて憑きもの筋を社会構造との連環の中で捉え、当該社会における機能にまで分析の手を伸ばす斬新なものであったと評価すべきであろう〔石塚 1990:pp.498-499〕。例えば吉田は、「憑

きもの筋」の語りが「不幸を説明する機能」を持つとする、後の小松の説明体系の先駆けとも言えるべき慧眼を見せるとともに、憑きもの筋が村の規範や価値体系を維持する働きを持つとする、社会における安全弁としての機能に言及している〔吉田 1990:pp.112-192〕。また、これまで一括して扱われてきた憑きもの筋にも地域による発生時期の差があること、憑きもの筋によって結び付けられる人物にはある程度の恣意性が認められること等、多くの提言と課題を残してもいる。

しかし、憑きもの筋の語りが機能を果たすためには、その社会に所属するパーソナリティ間に生活上の緊密な繋がりが必要とされる。吉田もこの点を踏まえ、憑きもの筋の語りが存在するのは村落社会であると述べたが、こうしたつながりの薄れた現代でも、憑きもの筋の語りは存在している。

また、小松の提示した説明体系も、大枠では一定の妥当性を有しながらも、憑きもの研究の膨大な蓄積を超えるとは考え難い。小松は、「憑きもの」の語において、これまで民俗学が着目してきた「もの」の意義を否定し、何かが憑いている状態を意味する「つき」への注目を発展させることで、突発的な憑きものや憑きもの筋、座敷童などの全ての「憑きもの」を一つのパラダイムで扱う可能性を示したが、「もの」をツキという状態を仮に名詞化するだけの機能を有するとして捨象する点は性急であろう。折口など日本民俗学の初期から「もの」の検討は行われ、「もの」には「神」、「外から災いする力を持った恐ろしい靈魂」、「人間にとって邪悪なもの」といった、マイナスイメージを伴う霊的存在としての確固たる意味を持つことが明らかとなっている⁽²⁾。また、説明体系についても、小松の指摘するように、「憑きもの」の語りが日常における説明不可能な出来事を「ついている」という表現で仮の説明を試みるだけであれば、その憑依主体や憑きものの起源論が、憑きものの語りにおいて重要視されることはなかった筈である。小松の説明体系では、主に突発的な憑きものを扱い、憑きもの筋への援用は示唆する程度に留められているが、憑きもの全体を画一的・モデル的に扱うことで、フィールドに立ち現れる特異な変容を遂げた「犬神」⁽³⁾に対応出来るとは考え難い。

1-6 憑きもの筋研究の動向—遡源的／共時的研究から通時的研究へ—

ここで、各研究者達の見解とは別に、「憑きもの筋研究」そのものの動向を検討する。まず、民俗学の研究動向を振り返ると、先述の石塚が自戒の意味も込めて述懐したように、遡源的研究であった。特に戦後期の憑きもの筋再燃に対処する形で盛り上がった民俗学の研究は、憑きもの筋の発祥を解き明かし、この迷信に根拠が無いことを示した上で、憑きもの筋にまつわる社会的緊張を解消することを目指していた。民俗学の研究動向は、研究が行われた当時から憑きもの筋の発生へ、現在から過去へ遡上する研究であったと考えることが出来る。

一方、人類学の憑きもの筋研究は多分に共時的である。これは、偶然の差異ではなく、吉田が石塚からフィールドを託される形で社会人類学的研究を始めたことに端を発しており、石塚も吉

田らの研究を、民俗学の欠を補い社会構造から憑きもの筋を分析したとして好意的に捉えている〔石塚 1990：pp.498-499〕。人類学の憑きもの研究は、研究が行われた時点での憑きもの筋が社会構造と如何なる連環を成しているかの解明に注力している。この点は、憑きもの筋の問題を社会構造から離れ個人間のコミュニケーションとして検討した小松にも共通する点である。以上を踏まえると、人類学の憑きもの筋研究は極めて共時的色合いが濃いことが分かる。

先行研究をその動向から概観すると、現在から過去へ向かう遡源的研究と、現時点のデータに注目する共時的研究が行われてきたと言える。しかしながら、現在の高知県幡多地方における「犬神」は、多くの点で戦後とは異なる変容を遂げており、その変容の要因を時間の経過による民俗の希薄化に帰することは難しい。そこで本稿は、高知県をフィールドとして、フィールド内に存在した戦後から現在までのフィクションを含む文献資料に注目し、それらの資料における「犬神」の記述や、登場の頻度、時期による表現の差や、学術研究との関わりを検討する。

この研究手法は過去から現在へ至ろうとする通時的／歴史的研究であり、戦後の憑きもの筋再燃から五十余年を経て、憑きもの筋が歴史化した今日において初めて可能となるものである。また、メディアによる情報発信は、発信者と受信者の間に紐帯を必要としない外在化した情報伝達であり、社会や個人間の関係性の中で考察されてきた先行研究とは異なる視角に立つものである。

2. 新聞を通して戦後高知県の「犬神」に働いた力学

2-1 高知新聞に登場した「犬神」

高知県では、新聞に犬神にまつわる記事が登場する場合が散見される。憑きものとメディアの関連に着目する本稿では、まず高知県下で大きなシェアを誇る高知新聞を例として、その内容分析と時期による記事の頻度の変遷を追う。高知新聞から本稿でテーマとする憑きもの筋「犬神」に関する記事を抜き出すと、戦後から現在まで以下22点が見出される。なお、人生相談等記事の執筆者が一般の人々となる場合には、プライバシーに配慮し記事中に記載がある場合でも実名や詳細な住所は伏せる。

【資料1】昭和25年10月5日（木曜日）2面「直言」幡多郡・男性

【資料2】昭和26年2月14日（水曜日）4面「同口異曲」

【資料3】昭和28年4月29日（水曜日）4面「まだ残る封建制22 犬神統と結婚」主婦、27歳女性

【資料4】昭和28年7月27日（月曜日）3面「閑話有題 竹村義一氏の巻① 犬神さまの集団発生 凄艶な源氏物語の生霊」

【資料5】昭和30年6月10日（金曜日）4面「人生ガイド 犬神統の女との結婚は？ 人格、心身の健康に留意せよ」答える人：紫藤貞一郎

【資料6】昭和34年8月21日（金曜日）5面「郷土史夜話（41） 犬神の記録（一）」平尾道雄

【資料7】昭和34年8月22日（土曜日）5面「郷土史夜話（42） 犬神の記録（二）」平尾道雄

【資料8】昭和39年2月24日（月曜日）4面「人生ガイド “犬神” 統の夫人とトラブルを起こして不安 俗信の実態を正しく 渦中から離れ客観的に」質問者：高岡郡H生、回答者：西村久子

【資料9】昭和39年3月2日（月曜日）6面「読者の広場 “犬神” 問題について一考を」高岡郡窪川町、農業、37歳男性

【資料10】昭和42年10月25日（水曜日）1面「話題 迷信と人権」森下

【資料11】昭和49年12月24日（火曜日）11面「読者の広場 犬神はまだ生きている」高知市、会社員、48歳男性

【資料12】平成6年2月14日（月曜日）14面「学芸 狗神異聞」坂東真砂子

【資料13】平成6年4月17日（日曜日）23面「高知出版展望 最近の文庫本から いざなぎ流を主題に 小松和彦」

【資料14】平成9年7月15日（火曜日）4面「宮崎アニメ「もののけ姫」 森の神々と人間の戦い」

【資料15】平成10年10月14日（水曜日）13面「ローカルジャーナル」

【資料16】平成11年4月15日（木曜日）14面「ローカルジャーナル」

【資料17】平成14年11月21日（木曜日）28面「山の太夫NYへ 「物部村いざなぎ流」考2」

【資料18】平成16年10月29日（金曜日）2面「県人特集 「ルーツは土佐にありて」 森田 正馬（もりた まさたけ）」

【資料19】平成20年1月31日（木曜日）24面「大豊町舞台に時代小説 坂東真砂子さん抑圧された農民描く 出版記念来月9日に鼎談」浅田美由紀

【資料20】平成20年2月10日（日曜日）26面「坂東真砂子さん新作舞台で鼎談 大豊町で歴史家らと 「昔の風情残るのは財産」 井上太郎

【資料21】平成20年2月24日（日曜日）12面「読書 坂東真砂子著 本県での“集団狗神憑き”」田村文：高知新聞学芸部記者

【資料22】平成22年6月18日（金曜日）1面「小社会」

1) 実生活と結び付いた犬神記事

戦後の高知新聞において、犬神は【資料1】の昭和25年10月5日の記事に初めて登場する。この記事での犬神は「^{いぬがみとう}犬神統」⁽⁴⁾という民俗語彙で表現され、幡多郡某所において、犬神統への差別と排斥が続いていることが批判的に記述されている。幡多郡某所では、指導階級であるはずの村会議員までもが犬神統への差別を積極的に行っており、執筆者はそうした指導階級の態度を厳

しく批判し、この地から斯様な迷信を一刻も早く排除すべきであると結んでいる。

続いて犬神が登場する記事は、【資料2】「同口異曲」の後半部である。ここでもやはり、幡多路には「犬神統」の迷信が強く残っていることを批判している。この記事において注目すべきは、①犬神統の者は押し入れの中に隠した油ツボに小さな犬コロ数匹を大事に飼っている、②犬神統の者は、その性質も犬に似てドンラン・シツヨウ（貪婪・執拗）である、③犬神統の者とそれ以外では結婚に大変な障害があり、相思相愛の男女が破局せざるを得ないような悲劇が多々起っている、④幡多郡では年長者はもとより、因習打破を叫ぶ若者たちの間にも、犬神統への迷信は根強く残っている、の4点である。以上4点の特徴は、石塚ら今日までの憑きもの筋研究で多数報告された一般的な犬神の性質や差別の内容と合致する。

【資料3】の記事では、実際に「犬神統」とされ、二度も結婚を破談にされた若い女性の悲劇と、迷信打破、日本の民主化への強い思いが綴られる。投稿者の女性は自身が犬神統であることを知らずに育ったが、犬神統であることから愛した男性との結婚を周囲の妨げによって二度も破談にされ、ついには自分の体に忌まわしき血が流れていると思い込み、卑屈な性格になってしまうほど追い詰められたと語る。投稿者は、「犬神統」という言葉の起源は、①「犬神の祈祷師」なる職種を指す言葉の一部と、②「血統」に代表される、一筋に続くものとしての意味を持つ「統」、の2つが統合された結果だとしている。

【資料4】は、竹村義一氏と記者の対談の文字起こしであり、記事中で竹村氏は高知県に今なお残る「犬神さま」とそれにまつわる差別を批判している。記者の側も、長岡郡豊永村で起こった集団犬神憑きや、飢えた犬の首を刎ねる犬神作成法に言及している。文中の集団犬神憑きは、「豊永郷奇怪略記」と題される文書にその顛末がまとめられた、弘化元年（1844）正月十六日に発生した事件のことを指すとみて間違いないだろう。この事件については、第三章で詳細な検討を行う。

【資料5】は、幡多郡以外の地域における「犬神統」の情報が詰まった貴重な資料である。ここでは、かつて高知県東部に存在した香美郡に住む青年が、相思相愛で将来を誓い合った仲の女性との結婚を両親に「犬神統だから」という理由から頑なに反対されていると述べている。この記事において、「犬神統」は「犬神」の血筋を意味し、青年の両親は、①「犬神」は他人に「くいついて」病気や不幸に陥らせる人間とは異なる存在であると同時に、②統の者自体が「犬神」であり、「犬神」の者は女が多く奸智に長けて末恐ろしい、と信じている。また、この記事は人生相談の形式を採っており、回答者は、「犬神つき」の者は自我意識の分裂を起こしやすい一種の精神病質の人々であり、青年の結婚相手に関しても、心身共に健康であれば結婚に躊躇することはないと背中を押している。

【資料6】、【資料7】では、土佐の幕末・維新史の研究家平尾道雄氏が、2日間に渡って5つの史料に散見される犬神の紹介を行っている。平尾氏は昭和34年当時の犬神について、西の幡多

郡から東の安芸市近辺まで拡がっているとし、西側の方が東側よりもその語りは強いと述べている。本稿では、後の記事にも登場する「清水浦逃散」と呼ばれる文書に注目する。この文書には寛文12年（1672）3月12日、幡多郡下ノ茅の百姓九郎右衛門の一家が、息子の仁右衛門を除く9人で薩摩へ逃亡した事件のあらましが綴られている。当時無断で住居を立ち退く者は「走りもの」として厳刑に処することが常であり、役所側がただ一人残った仁右衛門から事情を聞いたところ、仁右衛門は親戚との連名で次のような差出書を役所へ提出した。

私、代々犬神持ちにて御座候。親九郎右衛門近年犬がみをむざと人につけ申し候に付、諸人に対して面目なき由常々申し迷惑がり申し候。なかなずく私の母迷惑がり打ち置かずなげき申し候。定めて此儀を迷惑仕り、所の堪忍もなりがたく存じ奉り欠落仕りたりと存じ奉り候。

この差出書によると、九郎右衛門一家が走りものとなった理由は、「犬神持ち」として差別されることに耐えかねたためとなる。この一連の事件は、後に坂東眞砂子の新聞記事や、舞台となった土佐清水市の市史にも登場しており、研究者の間でも高知の民俗学者桂井和雄から紹介を受けた石塚が『日本の憑きもの』で引用している。

【資料8】と【資料9】は互いの結び付きが非常に強い記事と考えられる。【資料8】は「犬神統」の夫人とトラブルを起こした高岡郡の男性の人生相談である。なお、高岡郡は本稿に度々登場する幡多郡の東隣に位置する。この記事で相談者は、先日から嫁（息子の嫁）の乳が出なくなったのは、「犬神血統」の隣家の夫人から届いた初孫出産のお祝いを辞退したためではないかと心配している。相談者は、嫁の乳が出なくなる以前に犬神統の夫人と何らかのトラブルを起こして陰悪な状態となっており、お祝いを断るという失礼な振る舞いもその遺恨が背景にあった。そしてこの振る舞いが夫人を怒らせ、犬神統の得体の知れない力によって嫁の乳を止めてしまったのではないかと危惧し、記事での相談に至ったのだという。相談の担当者は、夫人からの贈り物を辞退したことで、嫁は心の中で悪いことをしたという後悔と夫人の怒りへの恐怖が生まれ、そうした心理不安が乳の出に影響したというマイナスプラシーボ効果に似た解釈を述べ、こうした迷信を一日も早く捨て去り隣家の夫人と仲直りすべきだと勧めている。この記事の興味深い点は、相談の担当者が当時としては最先端の憑きもの研究であった桂井や石塚の著作を参考資料に挙げ、犬神とそれにまつわる差別が迷信であることを説いている点である。

この【資料8】に真っ向から異を唱えた記事が、【資料9】である。読者投稿コーナー「読者の広場」に高岡郡に住む男性（ただし【資料8】の相談者とは別人である）から寄せられた意見は、以下の点で回答者の考えを批判している。すなわち、①「犬神」を迷信だとして頭ごなしに否定している、②生霊や死霊は確かに存在し、先の乳が出なくなった嫁も犬神統の夫人からの霊波を受けての精神的ショックが原因であることを理解していない、③物質科学に捕らわれた考え

では、犬神問題の根本的解決には至ることが出来ない、の3点である。この投稿者の考えは独特であり、彼一人の意見を以て高知県や高岡郡の犬神意識の代表とすることは出来ない。注目すべきは、読者投稿欄を通して、憑きもの研究に対する一般社会からのリプライが行われている点であり、従来学術研究の「受信者」の立場に留め置かれてきた一般市民も、還元された情報をただ受け身に受容したとは限らないことを、【資料8】、【資料9】から窺うことが出来る。

【資料10】では、高知県に残る打破すべき迷信の一種として「犬神」が紹介されている。ここでの犬神は、①江戸中期以降に出現したもの、②狐のいない四国において、狐の代わりの役を果たすもの、③権力や財力で太刀打ち出来ない支配者への、被支配者側からの心理作戦だと述べられている。ここで注目すべきは、この記事には昭和42年までの憑きもの研究、中でも速水の『憑きもの持ち迷信』の影響が色濃いと考えられる点である。①、③は、速水の唱えた享保期の貨幣経済浸透説と酷似しており、学術研究の進展が社会の人々に外在的に働きかけ、新たな「犬神」イメージを形成した可能性も考えられる⁽⁵⁾。

【資料11】も【資料9】と同じ「読者の広場」に寄せられた意見であり、高知市の男性が自分の集めた資料を基に高知県に根付く犬神について語っている。

2) 実生活を離れた犬神記事

【資料12】からは、犬神に関する記事の趣が異なる。ここまでの11の資料は、実生活に存在する犬神とその差別に関する記事であったが、【資料12】以降は文学作品等「フィクション」に登場する犬神に主題がシフトしていく。

【資料12】では、犬神を題材とした恐怖小説『狗神』を執筆した坂東眞砂子が、自身が聞いた「狗神」にまつわる話と2つの史料を紹介し、狗神持ちが高知県ではごく最近まで実在した話であることを強調している。特に坂東は、【資料6】で挙げた「清水浦逃散」が『土佐清水市史』に登場することに注目し、この逃散を生活苦からの逃亡とする市史の記述〔土佐清水市史編集委員会1980：pp.461-463〕に対して、彼らの逃避行の真の原因は狗神による差別があったと記している。確かに市史では、山内家と島津家の間で逃亡者9名の処遇が決められる経緯を掲載しているのみであり、その逃散の原因も生活の困窮に帰してしまっている。「清水浦逃散」と市史の記述の違いは、市史執筆による意図的な史料利用によって、犬神にまつわる文書である「清水浦逃散」がその主題を生活の困窮に摩り替えられてしまった可能性も残っているが、この資料のみを根拠に両者の食い違いの要因を断定することは出来ない⁽⁶⁾。

【資料13】は、小松和彦の「憑霊信仰論」の出版を記念する記事であり、「犬神」という単語が登場するものの、小松が本の中で扱ったテーマの一つという位置付けに過ぎない。

【資料14】はフィクションとしての性格がより明確であり、映画「もののけ姫」に登場する山犬を、一度だけ「犬神」と表記したのみである。【資料15】、【資料16】の記述も、雑誌『土佐の

民話』に犬神にまつわる話が収録されたことを紹介したに留まっている。

【資料17】は、全12回からなるいざなぎ流特集の第2回の記事であり、小松がいざなぎ流研究者として紹介され、その紹介部分に「犬神」の単語が二度登場するものの、記事の主題には関わっていない。

【資料18】も高知県に生まれた神経症の大家森田正馬が、戦前に犬神にも興味を示したことを紹介する記事である。

【資料19】では再び坂東眞砂子が登場し、【資料4】でも登場した「豊永郷奇怪略記」を基に、大豊町を舞台とした時代小説『鬼神の狂乱』を書き上げたことを記念する記事となっている。【資料20】は、この小説の出版を記念して大豊町で行われた鼎談の様子を伝えるものである。【資料21】は『鬼神の狂乱』の書評記事であり、「豊永郷奇怪略記」などモデルとなった記録が存在することに言及しつつも、高知県における犬神の問題と絡めることなく、淡々としたレビューに徹している。

【資料22】も「怪異・妖怪伝承データベース」作成の中心となった小松の研究紹介に「犬神伝承」の語が用いらただけである。

2-2 小結

以上22の新聞記事を新たな一次資料として、戦後高知県の犬神に働いた力学を考察すると以下のような特徴が見出される。第一に、①【資料11】が掲載された昭和49年以降、実生活における犬神にまつわる記事は激減している。当然のことながら、記事が存在しないことと犬神自体が存在しないことは同一項で結べない上に、新聞の記述のあり方も昭和50年代を凡その境としてゴシップ的な記事は減少していくが、「社会問題としての犬神が高知新聞というメディアに登場した頻度」という観点から見れば、確かに【資料11】以降読者に働きかけるダイナミクスは弱体化していると表現して差し支えないだろう。しかし同時に、高知新聞において内容を問わず「犬神が登場した頻度そのもの」に注目すると、②戦後から現在まで一定の頻度で記事になっていると考えることも可能である。加えて【資料11】までの記事群は実生活上の問題を主題としている一方、【資料12】以降の記事群は過去の民俗の紹介や、犬神にまつわる諸研究の紹介、フィクションへの言及がテーマとなっている。つまり、③両群は記事の趣が明確に異なるものの、「犬神」という言葉を共通項として、リアルタイムの事件や社会問題と、過去の民俗、フィクションが同じ舞台上で扱われてきたと考えられる。特に③に関しては、拙稿⁽⁷⁾で言及してきた「犬神についてあまり知らない若い世代」が、メディアを通して発信される外在化した犬神情報をどのように受け取り、受容／拒否していったかをも今後の憑きもの筋研究で検討する必要性を示している。

さらに、高知県というフィールドに限定される特徴ではあるが、④実生活を離れた犬神情報発信に関しては、犬神やいざなぎ流の研究者として名を馳せる小松和彦と、高知を舞台としたホ

ラー小説を数多く執筆した坂東眞砂子の活動が、新たな犬神記事が生産される契機となってきたと考えられる。次章では、坂東眞砂子の犬神を題材とした作品群に目を向け、「犬神」を軸としたフィクションと現実の相互作用を考察する。

3. フィクションに登場した「犬神」－高知県を舞台とした小説を事例として－

3-1 フィクション検討の意義と目的

本章では、高知県出身の小説家坂東眞砂子の犬神を題材とした小説『狗神』と『鬼神の狂乱』を資料とし、作品内での犬神にまつわる記述と、そうした記述の下敷きとなった史料等との引用関係を考察する。かつて柳田は、近世の文書史料でさえ憑きもの筋をおどろおどろしく誇張したゴシップとしての傾向が強いとの警鐘を鳴らしている。また、学術研究におけるフィクションの利用は慎重に行うべきであり、作品の内容をそのまま学術研究の一次資料とすることは難しいであろう。

しかしながら、フィクションが現実の人々に影響を与える事例も後に示す新聞記事に見出されるため、フィクションと資料の間に隠された相互作用を見出すことが求められている。幸いにも憑きもの筋研究には今日までに膨大な資料の蓄積がなされており、それらを緻密に比較することで、上記の相互作用を明らかにする有意義な検討を行うことが出来ると期待される。

3-2 『狗神』について

坂東眞砂子の『狗神』は、高知県の山村・尾峰を舞台に、犬神筋の女性坊之宮美希と奴田原晃の禁じられた恋と尾峰集落に次々と起こる不可解な現象を描いたホラー小説である。物語の展開に伴い、坊之宮家が「狗神筋」であったことが明らかとなり、一連の怪奇現象と登場人物との隠された繋がりを軸にストーリーは進むが、この作品で描写された「狗神」⁽⁸⁾と、憑きもの筋の犬神の間には奇妙な関係が見出される。

この作品の「狗神」の描写は、従来の犬神と共通する部分と、坂東のオリジナリティが発揮された部分に分類することが可能である。まず、従来の犬神と共通する部分として、①壺の中に住む虫のように小さい存在で他人の物を欲しがる〔坂東 1996: p.143〕、②主人が他人を憎む、羨むといった激しい感情の動きに反応して自動的に行動する〔同上 pp.158-160〕、③狗神筋の者とは結婚をしない、④暗黙の裡に村八分に近い扱いをする〔同上 p.168, 203〕といった描写が挙げられる。これらの描写は、先行研究の示してきたデータと酷似している。

これに対して、坂東のオリジナリティが発揮された部分は、狗神の起源論に集約される。作中では、中世の妖怪鵺が源頼政に退治されて体を四分割され、かつての阿波（現徳島県）に流れ着いた体から、手足が鵺、体が黒い雲で出来た獣が生まれたとしている。この獣が坊之宮の先祖であり、狗神はこの獣の体に蚤のように付属していた存在だという〔同上 pp.264-265〕。

先行研究を参考に検討すると、この設定は実在した数種の起源伝承を融合させたものであることが分かる。石塚によると、徳島県の民俗として、犬神の発祥を、かつて妖怪の体を武力や祈祷によって分割した結果だとする起源伝承が存在したという。また、源頼政が射落とした鶴が徳島に流れ着いたことを、犬神の発祥とする伝承も見られたという〔石塚 2001: pp.56-57〕。これらを踏まえると、『狗神』における狗神筋は、「妖怪の体を分割した結果生まれた」とする起源伝承と、「妖怪鶴の体が流れ着き生まれた」とする起源伝承を、妖怪を共通項として融合させ、「妖怪鶴の体を分割したものが流れ着いた結果生まれた」としたものだと考えられる⁽⁹⁾。『狗神』というフィクションでは、かつての資料に現れた犬神を参考に狗神が生み出され、再び社会に発信されている。

3-3 『鬼神の狂乱』について

続いて坂東真砂子の『鬼神の狂乱』の内容に目を向ける。この小説は、幕末の土佐国豊永郷岩原村（現高知県長岡郡大豊町）で発生した集団狗神憑き事件⁽¹⁰⁾を題材としている。『鬼神の狂乱』は、【資料4】で挙げた「豊永郷奇怪略記」と同じく何者かに憑依された村人五人が「長丞によって狗神を憑けられた」と騒ぎ立て、次第に村中が狗神憑きに感染していくところから始まる。物語の中盤までこの異常事態は村人達の言葉通り「狗神憑き」と考えられ、太夫による祈祷などの対策が次々に講じられていく。物語中盤で憑依主体は自らを「阿波の古狸」と自称し、最終的にその正体は、岩原村の先祖の霊（鬼神）であったとされる。つまり、ストーリーを忠実に追った場合、この小説に登場する「狗神」は実際には犬神ではなかったと言える⁽¹¹⁾。

しかしながら、この小説は犬神と無関係ではない。作品中盤まで岩原村の事件は「狗神憑き」だと考えられていたため、憑かれた村人や狗神を祓おうとする周囲の者達の口を通じて、犬神にまつわる情報発信がなされている〔坂東 2008 pp.47-48, 62, 93, 110-111, 135〕。また、話の本筋から離れた部分では、岩原村において五十余年もの間「狗神筋」とされてきた長丞の苦しみという形で、犬神とそれにまつわる差別への直接的な言及も行われている〔同上 pp. 64-68〕。

さらに、坂東は附記において、豊永郷で起こった集団犬神憑き事件に関する文書が「豊永郷奇怪略記」と「岩原遺聞録草稿」の二種類存在し、それらの示す年代や事件の経緯、憑依主体が異なることに注目したと記している〔同上 pp. 322-325〕。『鬼神の狂乱』においては、坂東は大筋で野島馬三郎（通玄）の「豊永郷奇怪略記」に則り、文書を通した事件の展開に沿う形に小説を書き上げている。なお、近世文書を中心とした史料の利用に際して、坂東は高知県の歴史家達の協力を得るとともに、平尾道雄らの著作を参考にしている〔同上 pp.3-7, 322-326〕。

「豊永郷奇怪略記」の内容と、『鬼神の狂乱』で描かれた事件を比較すると、事件の展開は両者の間ではほぼ一致している。「豊永郷奇怪略記」における事件の経過は、村人の一人長丞に犬神を憑けられたと村人達が騒ぎ立て、長丞方に祓いの祭りを要求することから始まる。その後村中に

拡大し最終的には64人に至る狂乱者達への度重なる祈祷が行われる過程で、憑依された村人の口から憑依主体が阿波の古狸であることが告げられる。事態を重く見た土佐藩からの足軽隊の派遣により岩原村での騒動は一旦の終着を迎えるが、その後14人に狂乱再発の兆しが見えたため、五台山で高善院律師と引き合わせた村人に再度祈祷を執行し事態は収拾した。先述の通り、「豊永郷奇怪略記」では最終的に犬神は騒動の原因とされなかったが、この事件において当初は「加害者」と看做されていた長丞に対して、村の組合への参加を認めるよう藩の役人側から要請が下るといふ、副次的な結果も生まれた模様である〔野島 2010〕。また、「豊永郷奇怪略記」で憑依主体が究明されなかった点に着目し、鬼神（先祖の霊）を真の憑依主体とした点には坂東の独創性が発揮されている。

また、『狗神』と『鬼神の狂乱』は、フィクションであるがゆえに生活社会に影響を与えなかったと断じることは早計である。この実例として、下に毎日新聞の記事を挙げる。

3-4 フィクションと生活世界の相互作用

毎日新聞高知地方版には、以下2点の興味深い記事が掲載されている。

【資料 A】平成11年1月11日（月曜日）「支局長からの手紙 伝奇小説」伊賀憲司

【資料 B】平成13年1月22日（月曜日）「支局長からの手紙 犬神」伊賀憲司

これらの記事は、坂東の著作に刺激を受けた毎日新聞高知支局長伊賀憲司氏の手によるものである。【資料 A】では、坂東の著作『死国』と『狗神』を読んだ伊賀氏が、両作品の粗筋をまとめ、自身の感想を述べている。『狗神』に関しては、作品そのものがフィクションであることは認めた上で、高知県にも確かに犬神による差別が存在し、そうした差別は許すべきではないとして記事を結んでいる。

【資料 A】から2年後の平成13年の紙面に掲載された【資料 B】は、『狗神』が映画化されたことを記念する記事としての体裁を採っているが、主題は伊賀氏がこの2年間で育てた犬神に対する批判的解釈である。伊賀氏は【資料 A】を執筆した2年前から農村部の高齢者を中心とした聞き取りを行い、以前よりは少なくなったものの犬神とそれにまつわる差別が確かに存在することを聞き得たという。また、吉田の『日本の憑きもの』、小松の『憑霊信仰論』を引用し、犬神による差別の不当性と、差別撤廃の難しさにも言及している。

この2資料は、あくまで単一の事例ではあるものの、フィクションと生活世界の関わりを端的に示している。これまで述べてきたように、坂東の作品『狗神』と『鬼神の狂乱』はフィクションではあるものの、その下敷きとして、各地の犬神伝承や高知県で実際に起こった事件、すなわち生活世界のデータが用いられている。そして、フィクションの世界に飛び立った「犬神」は、

実在の人物（伊賀氏）の関心を刺激し、フィールドにおける犬神の聞き取りを敢行させるまでに至った。現実がフィクションに影響するだけに留まらず、従来想定されてこなかったフィクションが現実を刺激する真逆の力学も確かに高知県では働いていたのである。こうした点を踏まえると、生活世界とフィクションは、相互に影響を及ぼし合っていると解釈出来る。

3-5 小結

本章での議論を総括すると、①坂東眞砂子一人の事例であるとはいえ、小説というフィクションの誕生にも、史料を中心とした現実の犬神情報が多分に使用されている、②しかしながら、検証や論拠を必要としないフィクションにおける「犬神」は、作者の創造力だけを頼りにした変容を許される極めて可塑性の高いものとなり、社会や集団内で一定の情報の共有を強いられてきた実生活上の犬神とは異なるものであると考えなければならないといった考察が導出される。さらに、③「犬神」は現実とフィクションの間で相互作用を及ぼしており、高知県というフィールドに限っても、今後折に触れてメディアに登場し新たな働きかけを行う可能性がある。

以上3点を念頭に置き、次章でメディアを通した犬神にまつわる情報発信への考察を行う。

4. 結 論

本稿では、高知県をフィールドとして、戦後から今日まで、換言すれば過去から現在への憑きもの筋の通時的研究を試みた。この研究の端緒として、社会や個人の間で共有される形で受け継がれてきたとされる「犬神」に、受信者と発信者の紐帯を必要としないメディアからの外在的力学が働いてきたことに注目し、新聞記事や小説を文献資料として考察を行った。

考察の結果、高知県の「犬神」には、昭和40年代までは実生活上の解消すべき問題として、啓蒙活動と捉えるべき批判が度々提出されてきたことが分かる⁽¹²⁾。こうした批判には、記事の執筆者の主観や個人見解が数多く封入されるものの、石塚や速水、吉田、小松ら先達の研究成果が「犬神」の迷信たる論拠として援用されることも多かった。この点に依拠して考えると、かつて民俗学が目指した実学としての憑きもの研究は、確かに一般社会に還元されたと評価すべきだろう。

また、高知県というフィールドに限定すれば、坂東眞砂子と小松和彦の業績紹介が、近年の高知県における文献資料に犬神が登場する大きな契機となっていることが分かる。従来の犬神とは異なり、実生活とは全く関係の無いところから「犬神」に関する情報発信が行われる点にメディアを通した犬神の特徴があり、今後も憑きもの筋研究の進展やフィクション作品の登場に伴い、新たなキーパーソンが増えていくとも考えられる。故に、民俗としての憑きもの筋・犬神は確かに薄れつつあるものの、今後も「犬神」が単線的に減少すると結論付けることは難しい。

加えて、実際の事件や資料から創作が生まれ、創作が生活世界の犬神を刺激する、ノンフィク

ションとフィクションの相互作用も資料から認められた。フィクションの資料としての援用には慎重を期すべきであるが、実際に人々に実感を伴う影響を与えるファクターであることは確かであり、今後の憑きもの筋研究では新たな一次資料としての検討がなされるべきであろう。

おわりに

本稿では、資料の引用関係を明確にし、これまで得たフィールドデータとの比較検討を期すためあえてメディアを文献資料に限定したが、戦後の憑きもの筋研究とこれに続く啓蒙活動では、ラジオ等他のメディアも積極的に活用された。また、憑きもの筋の問題は単独で社会に存在するのではなく、結婚や家、経済状況とも深く結び付いている。それら他のメディアや多方面の文献資料も含めた総合的検討は今後の課題とする。

また、高知県というフィールドに限定するため、夢野久作の『犬神博士』や京極夏彦の『姑獲鳥の夏』などの、憑きもの筋にまつわるフィクション作品であえて扱わなかったものもある。特に『姑獲鳥の夏』は小松の『憑霊信仰論』を下敷きに、憑きもの筋や憑きもの落としを扱った重要な資料であり、憑きもの筋の問題をより一般化する過程において検討を行いたい。

文献の方向性に目を向けると、犬神を「憑けた側」と「憑けられた側」、「加害者」と「被害者」の側の主張は多く見付かったものの、「落とす側」である太夫などの宗教職能者の言説が現時点で得られた資料からは抜け落ちていると言えるだろう。こうした資料の収集も今後の重要な目的とするが、いわば第三者として憑きもの筋に関わる宗教職能者側の言説は文献として残され難い可能性が高い。こうした文献資料の不足を補うため、フィールドデータの獲得が引き続き必要とされている。

以上、今日の憑きもの筋の個別性に着目し、現在の高知県における「犬神」に働いてきた力学を通時的に検討する甚だ試験的試みであったが、フィールドデータとの比較により憑きもの筋研究をより立体化させる一助となれば幸いである。

注

- (1) 『民俗学辞典』「憑物」の項より。なお、この項は柳田と早川孝太郎の共著である「おとら狐の話」や、川村杏樹の「蛇神犬神の類」、喜田貞吉の「憑物系統に関する民族学的研究」を基に執筆されている〔民俗学研究所 1951：pp.378-379〕。
- (2) 折口 1995a; 1995b; 1995c; 1995d; 1995e
- (3) この「犬神」については拙稿参照〔酒井2014〕。
- (4) 高知県の犬神を意味する民俗語彙として一般的なものであり、「犬神の血統」を意味しているとの解釈が多いが、「犬神党」と表記する場合も見られる。
- (5) もっとも、【資料10】が『憑きもの持ち迷信』を参考としたのか、偶然の類似の産物なのかは判別出来ないため、断言は避け可能性の提示に留める。
- (6) 単純に市史の執筆者が差出書の内容を知らず、住民の逃散を生活の困窮に帰した可能性も考えられる。

- (7) 酒井 2013; 2014
- (8) 坂東は『狗神』、『鬼神の狂乱』で「狗神」の表記を用いているため、引用となる部分では作中の表記に従った。なお、モデルとなった近世文書「豊永郷奇怪略記」では「犬神」の表記も度々用いられている。
- (9) なお、「妖怪鵄の体を分割したものが流れ着いた結果生まれた」のは、上述の通り坊之宮家の先祖であり、この妖怪に蚤のように付属してきた狗神の発祥について厳密には不明である。
- (10) 「豊永郷奇怪略記」の翻刻は多数存在するが、主な違いは漢字の表記違いや補った句点の有無であるため、本稿では『土佐國群書類従』の翻刻を用いた。
- (11) モデルとなった「豊永郷奇怪略記」でも、憑依された村人達は阿波の古狸と自称しているが、村境で憑依状態が途切れる等狸の仕業と考えるには辻褄の合わない点がある、としており、原因の究明はなされていない。
- (12) なお、筆者が2011年からフィールドとしてきた黒潮町（旧大方町）の公民館報にも、「犬神」にまつわる4記事が登場しており、修士論文でその内容分析を行った。

主要引用参考文献

- 石塚尊俊 1990「第七巻 憑きもの一解説」谷川健一編『日本民俗文化資料集成7 憑きもの』, 三一書房, pp.481-500.
- 石塚尊俊 2001(1959)『日本の憑きもの 俗信は今も生きている』, 未来社
- 折口信夫 1995a「鬼の話」『折口信夫全集 3』中央公論社, pp.9-18.
- 折口信夫 1995b「はちまきの話」『折口信夫全集 3』, 中央公論社, pp.19-26.
- 折口信夫 1995c「大嘗祭の本義」『折口信夫全集 3』, 中央公論社, pp.168-229.
- 折口信夫 1995d「霊魂の話」『折口信夫全集 3』, 中央公論社, pp.248-263.
- 香川雅信 2000「登校拒否と憑きもの信仰 - 現代に生きる「犬神憑き」 - 」, 小松和彦編『怪異の民俗学① 憑きもの』, 河出書房新社, pp.238-263.
- 喜田貞吉 1922「憑物系統に関する民族学的研究」『民族と歴史』8(1)
- 高知県史編纂委員会 1966『南路志翼目録』, 高知県史編纂委員会
- 小松和彦 1989(1984)a「「憑きもの」と民俗社会」『憑霊信仰論 妖怪研究への試み』ありな書房, pp.11-81.
- 小松和彦 1989(1984)b「説明体系としての「憑きもの」」『憑霊信仰論 妖怪研究への試み』ありな書房, pp.82-103.
- 酒井貴広 2012「現代社会における憑きものの変容」(文学研究科修士論文)
- 酒井貴広 2013「修士論文概要 現代社会における憑きものの変容」『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』58(4), pp.130-132.
- 酒井貴広 2014「現在までの憑きもの研究とその問題点 - 憑きもの研究の新たな視座獲得に向けて -」『早稲田大学 文学研究科紀要』早稲田大学大学院文学研究科, 59(4), pp.123-140.
- 土佐清水市史編纂委員会 1980『土佐清水市史 上巻』, ぎょうせい
- 野島通玄 2010「豊永郷奇怪略記」秋沢繁編『土佐國群書類従』12, 高知県立図書館, pp.293-305.
- 速水保孝 1990「狐持ち研究への疑問」谷川健一編『日本民俗文化資料集成7 憑きもの』, 三一書房, pp.229-245.
- 速水保孝 1999『憑きもの持ち迷信—その歴史的考察』, 明石書店
- 坂東真砂子 1996『狗神』, 角川文庫
- 坂東真砂子 2008『鬼神の狂乱』, 幻冬舎
- 民俗学研究所 1951「憑物」『民俗学辞典』柳田国男編, 東京堂, pp.378-379.
- 吉田禎吾 1999(1972)『日本の憑きもの 社会人類学的考察』, 中公新書